⊙**シヨツペンハウエル**の女子に就いての論文と、**ラスキン**の「**セサム、アンド、リリース**」中の「**リリース、オブ、クウインス、ガーデンス**」とを讀みて、兩者より提供せられし若干の問題を思ふ。（承前）　千葉安良

第三、以上の問題に對する批評及び論斷、

（一）　女性論の範圍に入るべき諸問題

4. 女子の道德性

女子の道德性に關しては兩氏ともに中々嚴格な言をなして居る。たゞ例によつてショ氏のは冷かに直接に言つてあり、ラ氏のは温かい嬉しいインスピレーションの裡に反省を促す書方がされて居る。今ショ氏のを列擧すれば、

（一）　女子は浪費の著しい傾向を有して居る女子はその心中に、男子は女子が浪費することの出來る金を得る爲に存在して居る樣に考へて居る。

（二）　女子は男子よりも多く不幸な人に同情する。然しそれは女子に理性が足りない結果である。

（三）　女子は公正、正直、忠實、などに於て男子に劣る。女子の性格の基礎的瑕疵は彼等が公正の感覺を少しも有して居らぬことである。女子は生得的に狡猾で、虚僞を言ふのを避け得ない傾向を有つて居るのだ。

（四）　女子は最初の根本的の德操は有して居ても、それを發達させる爲に常に必要な道具である所の、第二次の能力に缺けて居る。等である。以上は皆ショ氏の論の第四に言はれて居るのである。徹頭徹尾批評的に苛酷に言ひ放つてある此の說を得ては、柔らかく清い若い女子の心中に、強い誇りを伴つた反抗心が起らずにはすまぬ。然し暫く落ち著いて自分及凡ての婦人を考へて見てさて何と結論すべきであらうか。

ラ氏はショ氏の如く明かに道德性をとり出して言うて居ない。併し其美しい文章によつて何氣なしに語つて居ることの根底には、これに觸れた思想がある。先づシエークスピーアやスコツトの女性觀を擧げて次の條々を肯定して女子の天性中に一種の道德的天才性の存することを暗示して居る。即ち

（一）　女子は正義と純潔との模範である。

（二）　女子は常に難局を神聖化する。よしそれを救ひ得ない時でも、必ず一縷の純潔高尙な閃きを事件の中に透し込むのである。

（三）　女子は無限の優しさ柔らかさと明かな智性との中に、全く犯し難い品位と正義とを備へて居る。

（四）　少しの恐怖踪巡も無く敏捷に倦怠することなしに自己犧牲を行ふ。

等で、其の他あらゆる美しい道德性即ち

（五）　無邪氣な親切、單純な高尙な生活、沈靜、恒久不撓の忍耐、獻身的の孝悌、柔和沈默、等を有すること

を語り、更に鼓吹的に

（六）　女子の支配する所は何處でも正義の影が無くてはならぬ。それ故女子は忍耐づよく又腐敗することなしに善でなくてはならぬ。

と云ひ、又敎訓的に

（七）　愛の本能性幷びに權力を愛する心を正しく使用し訓練して、道德上女王的の生涯を營まねばならぬ。

と告げ、最後に當時の婦人を客觀して手嚴しい評論の一大鐵槌を下して居る。

（八）　斯くばかり偉大なる高尙な力を有する女子自身が、悲しいことには餘りに屢々怠惰で不注意である。些細なことに勢力を費し誇りを感じて居て、間違うた支配亂暴な

仕方を人間の中に行つて居るのである。又或る人はたゞ目前の慘劇から逃れ去つてしまつて、自身を我が花園の門内に閉ぢ籠めて、その垣の外には全世界が爭闘悲慘の荒涼の内にあるのを知りつゝ滿足して居るのである。用ひれば如何樣にも有益に立派に用ひられる力を無意義に浪費する愚かさには驚かざるを得ない。

と言ふのである。以上がラ氏の女子の道徳性に對する說である。一讀して嬉しい氣がする。力ある昂奮した心情で立派でなくてはならない有る力を有る限り働かせようと思ふ。併しこれも暫く落ち著いて今一度考へて見て、さて何と結論すべきであらうか。

先づショ氏のを評する。

1、浪費は男子だとてする。併し通論すれば確かに女子に此の傾向が多い。一般に女子は經濟思想に嚴密でない。そして男子のアンビションの遠大なのに比して、女子のヴハニテイは極めて卑近な所に力强く働く爲と、自己の美を希ふ心と蒐集の本能性とが結合して强い刺戟を喚起する爲とで勢ひ不自然な賣欲に捉はれるのである。固より人柄の良い敎育の徹底した婦人は此の弊からのがれて居る。

2、女子に同情心の强いのは、理性の不足の結果であるとの說、之れも或は事實かも知れない。しかし天性女子は男子よりも纖弱な腦神經組織を有して居るがため、理性の不足と言ふのみでなしに、實際忍び得ないのである。實際脆いのである。生れ付きに直覺的同情心を有して居るのである。惡く言へば輕燥な敏感性であらう。それ故此の結果は二つの反對なものを生ずる。一つは神にも近い慈悲同情となり（その積極的なるはナイチンゲール孃や瓜生岩子刀自の活動その消極的なるは「風吹けば沖つ白浪立つ田山」と詠んだ女の心である）一つは新物好きと言ふやうな操守のない一時的の氣分によつて他人に情けを浴びせかけるものとなるのである。

3、女子は虛僞を言ふのを避け得ない。これ

に就いては相當な人柄を有する、是非の分別に明らかな、正義の觀念の强い婦人は、失敬なことをと云はれるに違いない。然し大多數の婦人は胸の底で、かう云はれても仕方が無いと云ふかも知れない。恐らくは男子だとて、人格の卑い、輕燥な人々は皆さうだと斷言するを憚らない。虛僞を言ふことが、一種の趣味性となつて性格の根ざし深く入つて居る人があるらしい。此れは眞の實力なき人が、自己を立派にしたい爲に、小さな事に主權を握らうと、意識的無意識的に努力するため（これは畢竟自己の優越をのぞむ心——人類向上の盲目的意志——の誤つたあらはれにすぎない。）である。以上はおもに虛僞を言ふことを積極的に見たので、これを消極的に見て言ふと、それは「公正の感覺を有して居ない」といはれた事と關聯して來る。ショ氏の論の(三)は一面から見て確に事實であると思ふ。然し何處までも、一面から見て事實であると主張する。それは何故かと言へば、今迄の女子にとつては良人と子供とが、その生命の凡てであつたので、我が子可愛さの爲についい道義心に反抗してもその子供の目前の幸福を增してやり度く、貧しい親は盜みまですると云ふやうなことになり。又良人を庇ふためには生みの親にも心にない僞りをも云はねばならぬはめになつたりする。（又は反對に良人に對して自己を僞らねばならぬ必要を有つ人もある。）

斯樣な意味で家庭内の人であつた女子は、共同生活共存團體に公正の意識の絕對的に尊重さるべきであることを知る機會に出遇ふことが少いとと相俟つて、自己の都合をば萬事を行ふ標準とするやうになつてしまつたのである。女子が常に自己の都合を標準として行爲することの多いのは、畢竟種族保存の本能性の誤つたあらはれに過ぎない。生物學的に女子は自己を保護し、自己を肥大させようと云ふ盲目的衝動性を多く有して居るのである。ショ氏はこれを戀愛と云ふ方面から說くが、私は子孫にの愛からと云ふ方をも重く考へたい。即ち此の項に對しては、私はショ氏の酷評も事實であると肯定し且

つその由つて來る所も深く種族保存の本能にあることをも認めるのである。但しよく教育された耕された婦人は此の缺點から全然免れて居る。教育された人はより多く人類の理想、高尚なる心智に近づけられて居るからである。

4、第二次の德性能力に缺けて居ること。これも明らかな事實である。その由つて來る所は女子に客觀性の乏しい點に在る。妙な控へ目（羞恥の感より生ずるもの、讓遜のしほらしさが、誤つた方向にむけられた所から起る）が女子の根本の道德意識に釣り合はない無能力を來したのである。私の近親に四十を越した一人の紳士がある。その人は常に我等に對して如何にも禮儀正しく我等を尊敬する態度であしらつて呉れる私は此の人は女を尊敬する美はしい心を持つ立派な人、解つた人だと思つて居た。それで或時對談の序に、その人の女子に對する觀念を問うて見た。所が驚いた事には此の人は笑ひながら、「そうさなあ、先づ『女子と何とやらは……』と云はれて居る通りだ位の所だね」と答へた。

（女子と小人は養ひ難し。）私はその時、つく〴〵感じた。成る程男子は偉い者だ。心の寬いと云ふよりは寧ろ社交（ソーシャルキャラクター）性の發達は著るしいものだと思つた。女子にはかうした捌けた仕方は容易にできない。それだけ正直と云ふのではない。それだけ性格の修練が幼稚なのだ。これは心知の開發、性格の修練に心を靜めて從事する時を與へられなかつた、家庭生活に忠であつた過去の女子の歷史が然らしめたのである。婦人でも練られた人柄の人は、對者にの同情、對者の人格の尊重、又自身の品格の維持、圓滿なる交遊を希ふ心等から、所謂第二次の道德的能力の發達した人は幾らでも見得るのである。

以上ショ氏の論の凡てはよく婦人の道德性の缺點を指摘して居るものと思ふ。そしてその擧げられて居るものは、凡て相當な由來原因を有して、斯く性格と成り來つたものである。それ故人間の靈智が女子の心中に花を咲かせてその實が豐かに性格にみのりあらはれた時には、即ち良き修練が加へられたなら、皆その缺陷は救ひ得る兒れ得る筈のものと念ふ。根ざしは深き所にある缺點ながら、その缺點はその根ざしの伸び行く方向を誤つて育てられた故に起つたものである。その根ざしの上にも違つた養ひ方によつては、異つた花を咲かせ得る、ちがつた實をば結ばせ得る。

次にラ氏のを評して見よう。

5、その（一）と（二）とは、全く美しき女性に見得る立派な性格である。然しこれは極稀れに天才的な女子に見得るのみで、要するに理想からの言葉である。但し實際の行爲、才能の方から云へば、心情の方から云へば、女子は何事に就いても一事をのみ强く念ずるがためにその事の客觀的價値の如何に拘らず其れに就いては非常に力强い鋭い人情美を見せることが多いのである。これは凄血の淋漓たる中に慘憺たる凄美を見出すのと同じ樣なものである。煙に咽んでおろ〳〵するお七の姿の繪になるのも之れが爲である。つまらない行爲のかげにも、思ひつめた充實の心情は一種の鋭い美感を與へる。或る母親はその子の紺飛白の單衣を洗濯する時に、その飛白の模樣の白く抜けて居る所を一々一つ宛丹念に揉んでは洗つて居た。非常に手間のかゝる仕事である。側に見て居た子供は不審しくなつて何をするのかと問うた。母親はお前の心が此の飛白の樣に一つの汚點をも宿さぬやうにとの爲、と答へた。その刹那にその子供の心は云ひ知れぬ尊い清い美感にうたれた。かうした純潔さ、かうした心情の醇厚さが「一縷の純潔高尚な閃きを事件の中に透し込むのである」と云ふ結論を導いたのである。單に感情とのみでは云ひつくさない。精神生活の總和を心情と云ふ語で代表させてその心情の凝つた所に一種の道德的性格（モーラルキャラクター）——才能を超越した——を形づくるのである。

6、ラ氏の三は亦理想的の少數の婦人の實際をあらはすものである。女子に有る性格ではあるが、常に至り難いものである。敎育の理想の中には是非加へたいものゝ一つである。

7、その（四）なる少しの踈循恐怖もなく敏捷

に倦怠することなしに自己犧牲を行ふといふ一項は、過去の日本婦人に對して當に捧げらるべき讃辭であらう。曾に過去の日本婦人のみでは無い。あらゆる母親、あらゆるよき妻の一生を讃美すべき最も至當な文字であらう。時には凛々しい覺悟が伴つて一層悲壯にこれの行はるゝこともあるが、多くはその間に何の自覺も起らずになだらかに行はれて居るのである。女子が人類のなつかしい擁護者であることは、此の性格からである。その子とその良人と即人間の凡ての胸に、女子が温みと潤ひと感謝の涙とを與へるのは、此の性格からである。「女房は米の飯のやう」と云はれるのも「かあさん」の一語がやるせなき困憊の心情を蘇生せしむるのも、之れがためである、これは種族保存の本能の發達したものと心理學者は云ふ。私は「人中の聖なるもの」のあらはれよとのみ感じて默したい。「その人の地位學識はどの様にありませうとも、自分に對して最も大なる刺激を與へて下さる方が自分にとつては偉大なる力ちやございませんでせうか」と心美しき我が友は嘗て言はれた。かういふ意味で女子は多く人類中の偉大なる人間であり得ると思ふ。

8、その(五)により集めた諸種の小さき德目は女子の心情の可憐さの種々なあらはれであるその一つ一つを有する女子は多く、「感心な人」といふ眞面目な意識を衆人に與へて居る。

9、(六)(七)はラ氏と共に我々が自ら訓へ自ら育てたい。

10、(八)にとり出したラ氏の鐵槌はなか〳〵に手痛きものである。女子の道德的性格に於ける消極性をよく指摘して、女子の甲斐なさをよく知らせて居る。我々は次第に性格の内容に道德的才能を積極的に育てねばならぬ。我々はよく之れを覺えて居て、不明なるより起る安心と怠惰心とを追ひやつて、勇氣ある行爲に出づることを學ばねばならぬ。由來東洋の宗教、佛教や儒教はクリスト教に比べると人を消極の方、山中獨善の傾き、おのれを正しうするに止まらせる傾向が多い。信のために敢へて斷行して、「撰び出されたる人」の行動を以て自己を率ゐる

は、クリスト教の信仰の長所であると聞く。今や我が國人は廣大なる才を以て尨大なる理想を以て西洋の文化を同化し、クリスト教の信仰を消化せんとしてゐる。此の趨勢の裡にあつて我々女子はその最もよきものを身につけようとの心がけを常に持したい。そして此處にラ氏に笑はれたやうな事を少しでも少くしてゆきたい。

考へつゝければ反省も思惟も轉た繁きことであるが、要するに女子の道德性はその道德の本義——人類の共同生活に都合よき樣にと自然に形づくられた法則——に照し合はせて見ると、その實行的才能に於て修練が不十分で、その基礎的心情の方面には一部の力強きものを有すると云ふことになる。そして此の兩方面の表現は常に女子の行爲に矛盾せる影を見せるのであらう。又しても「女子は謎だ」と云はれるのであらう。さり乍ら一線の兩端は互に相背くものではない。藝術美も調和と矛盾との兩方面に見られるではないか。所詮は可憐な心情を擁して今日の生を全うし明日の生を安くする爲に健鬪する雄々しい覺悟敏い腕を有して、我等はその道德的生活を送つたらよからう。「苟も爲さざる所ありて而も爲すあるべし」我が生命の要求も相當に充たしつゝ、なほ人類の共同生活に都合よき樣に形づくられた自然の法則——それは人類向上進化の手段として必要なもの——に從順に服從し、自律の行爲をなして——道德の法則と自己の主觀とを合一せしむると——自由を享有すると共に十分にその自由に對する義務責任を明瞭に負うて行かれるだけに女子の道德性も發達せねばならぬ。我等の目前にはそのよき手本も示されてゐる。我等は所謂過度時代の婦人として徒らに奔放の放縱の生活に趨せるの愚を演じてはならぬ。人間の社會的生活の根柢をなす所の道德的生活にはおしつけでない敬虔と濶達なる理解とを以て、之を完うする才能を身につけ十分の成功ををさめることを豫期して動かねばならぬ。そして東するか西するかわからぬ婦人問題のやがて落ち著くべき處を定める力強き一面となり得る迄に女子の道德性を鍛鍊せねばならぬ。(第三論、第一章終り)(未完)